

## 日本人間ドック学会・健康保険組合連合会の「新たな検診の基本検査の基準範囲」に対する日本肥満学会の見解

本年 4 月に日本人間ドック学会と健康保険組合連合会が合同で組織された検査基準値及び有用性に関する調査研究小委員会が、「新たな検診の基本検査の基準範囲」を公表されました。この「新たな検診の基本検査の基準範囲」における BMI は、日本肥満学会の提唱する肥満、痩せの診断基準とは異なるため、日本肥満学会の BMI に関する考え方をここに述べます。

この「新たな検診の基本検査の基準範囲」の設定では、人間ドック受診者から一定の基準により「基準個体」を抽出し、その「基準個体」の測定値の 95%信頼区間の上限と下限を基準値として報告されています。この基準値は、BMI については、男性の場合下限 18.5、上限 27.7、女性の場合下限 16.8、上限 26.1 とされています。これは「基準個体」の平均的な BMI の分布がこの範囲に存在したことを示すものであり、BMI がこの範囲に入っていれば医学的に問題がない、あるいは、将来疾患を引き起こす可能性が低い、ということを保証するものではありません。

日本肥満学会は、BMI が 25 を超えると、高血圧、血清脂質の異常、糖尿病などの健康障害の発症頻度が増加することが知られているため、BMI25 以上を肥満と診断し、BMI25 以上であり肥満によって種々の病気の発症や増悪が懸念され、減量を必要とする状態を「肥満症」と定義しています。日本人間ドック学会・健康保険組合連合会の提唱する基準値の範囲であっても、「減量することにより種々の健康障害が改善する人」、つまり「肥満症」が含まれている可能性があります。特に男性の場合、BMI25.0 から 27.7 の間には、心血管病をはじめ、様々な疾患を引き起こしやすい高リスク肥満者である、内臓脂肪蓄積型肥満者が多く存在します。

また、日本肥満学会は BMI18.5 未満を低体重と定義しています。低体重も様々な疾患や健康上の問題を引き起こすことが知られています。今回の女性の BMI16.8 という基準範囲下限の設定は、最近増加傾向にある若い女性の痩せを容認することに繋がりがかねません。痩せた女性からは低出生体重児が生まれる頻度が増加し、低出生体重児は、将来肥満や糖尿病などの疾患を発症するリスクが高いことも報告されています。

厚生労働省の「日本人食事摂取基準（2015年版）の概要」<sup>注1)</sup>でも、18歳から49歳までが目標とする BMI は 18.5～24.9 とされています。このような点からも、日本肥満学会の肥満、痩せの診断基準には合理性があると考えます。

日本肥満学会 理事会

注1)

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000041733.html>